

短期海外研修プログラム紹介

Discover Brunei Course (ブルネイ・ダルサラーム大学)

およびGlobal Professionals Program (モナシュカレッジ)

参加学生の学び

植村 友香子、町原 友梨
(香川大学インターナショナルオフィス)

Short Term Overseas Study Program:
Learning Experiences from Discover Brunei Course (Universiti Brunei Darussalam)
and Global Professionals Program (Monash College)
Yukako UEMURA, Yuri MACHIARA
International Office, Kagawa University

要 旨

本稿は、香川大学インターナショナルオフィスからブルネイ・ダルサラーム大学、およびモナシュカレッジの短期海外研修プログラムに派遣した2名の学生の経験から得られた学びについて考察するものである。

それぞれが実施する4週間のプログラムは、英語力向上を主たる目的とした語学留学とは異なる。ブルネイ・ダルサラーム大学のDiscover Brunei Courseは講義に加え、実践的な活動や体験からブルネイ・ダルサラーム国特有の伝統や文化の学習をする構成となっており、教室外での学びを重視するプログラムである。一方、モナシュカレッジのGlobal Professionals Programではグローバルなビジネス環境で働くスキルや異文化理解能力を高めることを目的としている。

派遣学生の研修報告書と、補足インタビューから、今回の短期海外研修プログラムでは、解釈の枠組みの変化という肯定的な教育効果が観察できた。これは、現地の教員や学生、日本の他大学からの参加者を含む他の留学生との交流に加え、研修参加前の学習経験や本人の志向が前提となってもたらされたものである。

キーワード：短期海外研修、DBC、GPP、肯定的効果、解釈の枠組みの変化

はじめに

インターナショナルオフィスでは2018年8月に二つの新規短期海外研修プログラム「Discover Brunei Course」(ブルネイ・ダルサラーム大学)と「Global Professional Program」(モナシュカレッジ)へ学生を1名ずつ派遣した。本稿ではそれぞれのプログラムの実施内容を概説し、研修後に学生が提出した報告書の記述と補足的に行ったインタビューに基づいて、語学研修ではない短期海外研修による学びについて紹介する。

工藤（2011）は短期海外研修プログラムの最も重要な肯定的効果として「日常とは異なる空間での学修や異文化との出会いを通じた、解釈の枠組みの変化である」と述べる。「異文化理解や能力を促進するうえで重要なのは、経験自体ではなく、異質性や他者性を意識したなかで自らの経験を分析し、行動につなげる力である」とも指摘しているが、本稿で紹介する2名の学生に関しては、そのような教育的効果が示されているといえよう。

I Discover Brunei Course (DBC)

1. プログラム概要

Discover Brunei Course（以下DBC）は4週間の研修であり、伝統、近代化、宗教が調和するブルネイ・ダルサラーム国の特有性について理解を深めることを目的としている。

短期海外留学を希望する学生を対象に、香川大学では「Study Abroad」という全学共通科目を年1回開講しているが、2018年度からDBCがこの授業に加わり、1名の学生（以下A、文系学部2年生）が参加を希望した。

派遣先となるブルネイ・ダルサラーム大学は香川大学の協定校で、医学部との交流を起点に研究活動や研修留学、全学対象の交換留学など、活発な交流関係が構築されている。DBCは全学対象の短期海外研修として新たに実施したプログラムとなる。

【研修実施機関】ブルネイ・ダルサラーム大学（Universiti Brunei Darussalam）

【研修期間】2018年8月6日～9月2日（4週間）

研修期間は2月と8月に設けられているが、「Study Abroad」が前期に開講されるため、授業終了直後の8月に学生を派遣した。

【申請手続き】

申請手続きは香川大学インターナショナルオフィスを通して行った。申請書類には、プログラム申請書、課外活動参加申込書、健康診断書が含まれる。

【現地でのサポート体制】

留学生には「バディ」と呼ばれる学生が付く。バディは合計60名程おり、複数の短期プログラムに参加する留学生の生活や学業をサポートする。バディ役の学生は、自身の授業のない空き時間にプログラムに参加するため、留学生一人に専属のバディがいるわけではない。

また、参加者全員が携帯電話のグループチャットに登録して、情報共有や緊急時などに連絡を取り合えるようにしている。

【費用】費用の概算は以下のとおりである。

◆プログラム参加費：約16万円

◆航空運賃：約8万円

◆海外旅行保険保険料：約1万円

以上のほかに約11万円の授業料があるが、学術交流協定を締結しているため、徴収免除となっている。

【宿泊】The Core Residential College（大学寮）

大学寮はシェアハウス型で一戸ごとに共用のキッチンやバス・トイレと個室がついている。寮には管理人がおり、トラブルには柔軟に対応できる体制となっている。

【参加留学生】

計29名（日本14名、香港9名、中国4名、韓国1名、台湾1名）

2. 研修内容

ブルネイの「言語・文化」「歴史」「経済・産業」「環境」という四つのテーマについて、授業やワークショップ、課外見学から学ぶ構成となっている。体験学習は毎日実施されるのが基本で、教室外での学びを重視するプログラムである。

授業は講義、ディスカッションなどの様々な形式で行われる。

課外見学では、教員の代わりにバディが案内を務める。見学内容に関係する分野を専攻している学生が担当して、専門的な解説を行う。

プログラム中の課題や最終発表のグループ分けと発表テーマは、プログラム開始時に与えられる。そのため、留学生は4週間の間に複数回設けられている自由時間を利用してグループワークや発表の準備をすることができる。

【時間割】

Week 1	8/6	8/7	8/8	8/9	8/10	8/11	8/12
8:00-10:00	Checking In	Welcoming Ceremony	Basic Malay 1 (講義)	Free & Easy	Istana Nurul Iman, Traditional Open Market, Chinese Temple & Sultan Omar Ali Saifuddien Mosque (課外見学)	Brunei from 1959-1984 (講義)	Water Village Tour, Proboscis River Ecosystem & Waterfront (課外見学)
10:10-12:10			Melayu Islam Beraja: Islam Monarchy (講義)	Austronesian Language in Brunei (講義)		Basic Malay 2 (講義)	
13:30-16:30	Checking In	Ice-breaking Session Campus Tour	Malay Technology Museum (課外見学)	Brunei History Centre (課外見学)	Gulingtangan Traditional Brunei's Music (ワークショップ)	Jame' Asr Hassanil Bolkiah Mosque (課外見学)	Visiting Royal Regalia (課外見学)

第2週後半には2泊3日の「リーダーシップ活動」というキャンプ体験がある。この活動では、留学生が三つの班に分けられ、限られた道具を用いて自然の中で3日間を過ごす。

Week 2	8/13	8/14	8/15	8/16	8/17	8/18	8/19
8:00-10:00	Free & Easy Program fees payment	Islamic Civilization (講義)	Introduction to Brunei Culture & Lifestyle (講義)	Free & Easy	Outward Bound Brunei Darussalam Leadership Activities		
10:10-12:10		Biodiversity (講義)	A Cultural Studies Perspective (講義)	Brunei from 1906-1958 (講義)			
13:30-16:30	Brunei's Foreign Policy (講義)	Introduction on Silat (Malay Martial Arts) (ワークショップ)	Jawi Calligraphy (ワークショップ)	Brunei Arts & Handicraft Centre (課外見学)			

Week 3	8/20	8/21	8/22	8/23	8/24	8/25	8/26
8:00-10:00	Free & Easy	Entrepreneurship (講義)	Hari Raya Aidiladha (祝日)	SME in Brunei Darussalam (講義)	Free & Easy	Visit to the Eco-Ponies at Tutong District (課外見学)	Recreational Activities on a Car-Free Sunday at Bandar Seri Begawan (Bandarku Ceria)
10:10-12:10		Introduction to Linguistic Ecology in Brunei (講義)		Growth of Islamic Banking in Brunei (講義)			
13:30-16:30		Economy of Brunei Darussalam (講義)		Silat (Malay Martial Arts) (ワークショップ)	Visit to Sago Factory (課外見学)		Free & Easy

第4週目はワークショップ二つと最終発表となっている。ワークショップは、ブルネイ料理を作る調理実習と伝統的なダンスを習い、最終的に衣装や髪飾りを付けてステージで披露する体験である。

最終発表はグループプレゼンテーションを行う。Aのグループは「Languages in Brunei」というテーマについて発表した。各グループの発表はDBCで学んだ内容を互いに教えあう場になり、講義で難しいと思った内容でも、最終発表を聞いて改めて理解を深められたとのことだ。

Week 4	8/27	8/28	8/29	8/30	8/31	9/1	9/2
8:00-10:00	Traditional Brunei Food and Entrepreneurship at Brunei Youth Development Centre (ワークショップ)	Wedding Ceremony and Traditional Costume & Making Head Gear and Sinjang (ワークショップ)	Traditional Music & Dance (ワークショップ)	GDP Presentation Assessment	Closing Ceremony Preparation	Closing Ceremony	Accommodation Check-out
10:10-12:10							
13:30-16:30	Free & Easy	Introduction to Traditional Music & Dance (ワークショップ)	Traditional Dance on Stage Performance	GDP Presentation Assessment			

3. 参加学生Aの内省

3.1. 参加動機

Aは文系学部の2年生で、英語力を向上させたいという動機でこのプログラムに参加した。この動機についてはA自身が研修後の報告書の中で「私は、英語力を上げるという安直な目的のために留学することを決めた」と述べている。この「安直な」と自己評価するようになった点に、Aの得た学びや気づきが凝縮されているといえる。

3.2. 報告書の記述から

Aはこの研修を振り返って印象に残った点として「短期留学で身につけるべき本質についての気づき」「他者の目を通して自己を見つめること」「文化的背景の異なる教員・留学生たちとの対話」を挙げている。

まず、語学研修ではない留学において、一か月という短期間で英語力を伸ばすことは「かなり厳しい」と実感した。「英語はあくまでツールであり、自分たちが日本人として何を発信するか、留学生

や現地の人との交流を通じて自分がどう変わるかということが非常に大切であると今は知った」と述べている。

英語が出来るのは当たり前、基礎力がある前提で、大学で幅広い授業を受けて、そこから何を学び取るか、どのように社会に対する考え方を広げていくか、ということに時間をかけることが短期留学の本質なのだと学んだ。

次に他者の目であるが、Aはそれを実感させられた具体的な例として、店で「おつりを受け取ったりするとき日本人はいつもお辞儀してからうけとるよね」と香港の学生に指摘されたこと、授業で第二言語習得に関して質問をした際に、その教員や他の留学生の見解に自分の考えとの差を大きく感じたこと、などを挙げている。日常の些細なふるまいから、学術的な見解にいたるまで、自分にとって当たり前のことを「異質なものとして見る」視点に大きな刺激を受けた。

この二つの気づきをもたらしたのが出身の異なる留学生たちとの対話であった。「自分には英会話の自信はなかったけれど、本当は会話をしようとしなかっただけだったのだと気づいた。間違いを恐れる心が自分の成長を止めていたのだと感じる。」と述べている。

プログラム最後の週になると留学生と深く話をするようになっていった。私はシンガポール経由での帰国で、12時間ほど韓国の女の子の留学生と空港で話し続けたのが最も記憶に残った時間だった。お互いに英語のネイティブ話者ではないので、分からない単語は頻繁に出てくるし、決してすらすらと会話をしていただけではないかもしれないが、単語を変えたり、身振り手振りを加えたりして伝えることで楽しく会話が出来た。引っ越しのことをimmigrationと言っていて、動きだけは合っているねと笑い合ったりするなど、二人だけに成立する会話もできあがるくらいだ。でもこれが真のコミュニケーションであると私たちは考えた。唯一の二人の共通点は英語を話せることであり、それを通じて、将来のこと、結婚観、北朝鮮と韓国の関係、世界で通じない母国語の必要性など、本当にさまざまなトピックについて意見交換が出来た。何を話すか、どう話すか、伝えようとする意志があればなにも問題はないのだ。

4. 学び

補足インタビューにおいてAは、今回の留学においては、参加学生たちにとって英語が第二言語であったことがよかったと語っている。誰にとっても外国語である英語を使っているのだから、誰も完璧には英語を使えない、少々間違っても大丈夫と思え、グループの中に一人でも日本人ではない学生がいたら英語を使おうという雰囲気になれた。日本人は英語が下手だからという話を中国の学生にしたところ、「いや、私たちはそれは日本人が下手、ということではなく『日本人の英語』という概念で捉えている」と言われたこともあって、完璧でなくてもよいのだと思えた。もし、周りがみんな英語を母語とする人たちばかりだったら劣等感で話せなかったかもしれない、と語っている。

また、Aは英語が留学のためのツールであると認識しただけでなく、「留学そのものがツール」であると語っている。何のためのツールかと問うと、研修前は留学することをゴールそのもののように捉えていたが、研修後は、留学はその先にあるゴールのために自分を変えるためのものだと認識する

ようになったとのことであった。

Aにとっては、留学生同士や現地の人といった、自分と異なる背景を持つ人々との対話は、新しい見方や考え方が教えられずとも「入ってくる」経験だった。海外研修は、自分の常識が壊されることで「自分が変わる一か月」であり、「私でないもの」に寛大になれたと感じている。

留学で体験したことを咀嚼し、自分なりの解釈を見出す過程を繰り返すことで、自分が変わる。変わった自分が世界を見ると、社会の課題にどう働きかけることができるかという視点が生まれる。常識だと思ってあきらめていたことが、そうではないと気づくことで、自ら環境を変えることが可能なのだという気づきを得た。そして、環境を変えるために働きかけることがゴールなのだと思えるようになった。

短期海外研修を経てAは、より長期の留学をめざし準備を始めている。

II Global Professionals Program (GPP)

1. プログラム概要

Global Professionals Program（以下GPP）に学生を派遣するきっかけとなったのは、インターナショナルオフィス国際グループ職員1名が職員研修で訪れたモナシュカレッジで、本プログラム担当の現地日本人職員の知己を得たことである。2017年11月には当職員が香川大学インターナショナルオフィスを訪問し、GPPについて詳細な説明を行ったことで、本研修についての情報を得ることができた。

2018年夏実施のGPPを全学に周知した結果、学生（以下B、理系学部4年生）1名の参加希望があった。出発前にはインターナショナルオフィスにおいて、現地職員とのスカイプ面談、および英語のプレースメントテストを行った。具体的な申請手続きは現地担当者からのメールによる指示に従って、学生本人が行った。

香川大学の協定校ではないモナシュカレッジへの派遣であるため、学生には単位認定等は認められないが、それを承知でのプログラム参加であった。

【研修実施機関】モナシュカレッジ (Monash College)

モナシュカレッジはモナシュ大学に付属する教育機関で、モナシュ大学進学希望者に対してアカデミックスキルや英語の予備教育を行っている。

【期間】2018年8月5日～8月31日（4週間）

【本研修が目指すもの】

グループワークやディスカッション、現地企業訪問等の体験学習を通して、グローバルな視点、異文化理解能力、グローバルプロフェッショナルスキルを涵養することを目的としている。ここでいうグローバルプロフェッショナルスキルには「効果的なコミュニケーション、チームワーク、リーダーシップ、問題解決、ネットワーキング、批判的・分析的思考、プレゼンテーションスキル」が含まれる。

参加者にはIELTS 5.5以上の英語力が求められる。

【クラス編成】

1クラス15～16人程度で、前半の2週間は中国からと日本の他大学からの学生たちとの混合クラスだった。3週間目からは日本人のみで構成されるクラスとなった。

【事前学習】

事前学習として、「日本の働き方改革について調べる」「身近な人の働き方についてインタビューする」「リーダーシップとは何か」について考える課題が課された。Bは、友人や知り合い等に働き方についてのアンケートを行う、関連文献を調べるなどの準備を行ったうえでプログラムに参加した。

【参加費用】 50～60万円

【宿泊】 ホームステイ

2. 研修内容

トレーナーと呼ばれる教員の指導の下、15名程度の少人数クラスでインタラクティブに授業が進められる。前半の2週間は異文化理解やプロフェッショナルスキルについての概念や理論の説明とそれに関するペアワークやグループワークが中心であった。また、1週目には移民博物館の見学、2週目には企業訪問が行われ、その内容をテーマに週の最終日（金曜日）にグループ発表が課される。

学生に対する評価はビデオ作成やプレゼンテーションによって行われる。例えば、「Personal Branding」について学習した後は、スマートフォンで自分の性格について紹介する動画を撮るという課題が出された。

Week 1	8/6	8/7	8/8	8/9	8/10
9:00-12:00	Workshop: Leadership Orientation: Setting up for Success	Australia and its People	Presentation: Australia – an Immigration Nation	Global Branding	Activity: English Connect
13:00-16:00	Networks: Making Connections	Immigration Museum	Australia Local and Global	Global Branding	Team Project Delivery

Week 2	8/13	8/14	8/15	8/16	8/17
9:00-12:00	Looking Back, Moving Forward	Personal Branding	Company Culture	Company Visit	Team Project Delivery
13:00-16:00		The Culture Factor		Team Project Development	Graduation

後半の2週間は、4週目に行われる「シャークタンク」式最終発表に向けての準備が中心となった。時間割に「Project」とあるのは、この最終発表のためのプロジェクトを指している。テーマは「日本のものをオーストラリアに輸入する」で、Bは他大学の男子学生2名と組んで新幹線を輸入するという計画についての発表を準備した。日本人だけのクラスであっても授業中は英語を用いることはなっていたものの、最終発表が迫ってくると話し合う際に日本語を使うことが多くなったとのことである。

3週目にはゲストスピーカーとして日本大使館職員が招かれ国際機関で働くことについて講演を行った。4週目にはモナシュ大学の職員と働き方について意見交換する時間や、企業訪問もあったが、気持ちとしてはシャークタンクの準備が気がかりな状態であったようだ。

Week 3	8/20	8/21	8/22	8/23	8/24
9:00-12:00	Workstyles	Communicating with Impact	Small Talk	Leadership Workshop	Employability Skills
13:00-16:00	Project Introduction	Project Research	Project Survey	Guest Speaker	Farewell

Week 4	8/27	8/28	8/29	8/30	8/31
9:00-12:00	HR Session/ Company visit	Project Presentation	Project Preparation	Project Review	Project Delivery
13:00-16:00	Project Findings	Company Visit	Team Work	Project Practice	Evaluation & Farewell

3. 参加学生Bの内省

3.1. 参加動機

BはGPP参加以前にも、学部1年生時から所属学部が実施する短期留学プログラムに参加し、インドネシアで現地学生とフィールドワークを行うなど、合計すると8週間程度の短期海外研修への参加経験がある。それらの経験から英語を話すことへの抵抗感はなくなっていたが、非英語圏かつアジア圏での経験であり、欧米型のコミュニケーション能力にも、また実際のビジネスシーンで通用する英語力にも自信がなかったという。そのためGPPに参加して非アジア（欧米）の文化やコミュニケーションを経験したいという思いがあった。また、その時点では将来についての決断に悩みを感じていたこともあり、GPP参加によってそれを肯定できるのではという期待もあった。

GPPの研修内容に関する面では「海外で働くためのビジネススキルを身に着ける」点、および「グローバルスタンダードな働き方について知ることができる」点が参加を決意する理由となった。

3.2. 報告書の記述から

Bは研修期間全体を振り返って、特に印象に残っている気づきや学びとして「日本人だと自覚したこと」「（日本とオーストラリアの）働き方の違い」「自信をもつことの大切さ」の3点を挙げている。

参加したことで一番の収穫だったことは、海外行くのが好きで異文化の人とのコミュニケーションが好きだと思っていた私であっても国民性の違いを理解したことによって、やっぱり私は日本人だと自覚したことだと思う。

オーストラリアでは、学歴とか性別とか関係なしに、一人の人間として理解しようとする文化があって、だからこそ、自分の意見を持ってそれを相手に伝えることの重要性を感じた。これぞ「日本人らしさ」のもたらした盲点だと思うのだが、みんなと同じであれば目立つこともないし楽に生きていける、責任を負わないことがどれほど楽か、を知ってしまったから私は自分の主張をしてこなかったのではないかとGPPに参加したことで気が付くことが出来た。

インドネシアでの異文化経験はあったものの、当時は現地の文化に圧倒され、現地のやり方に馴染むことに懸命で、日本人であることへの意識すらもてなかったという。なかでもイスラム教が文化や生活に占める影響を強く感じ、「文化の違い＝宗教の違い」という認識を抱いた。しかし「移民の国オーストラリアでGPPに参加し、1か月間メルボルンに生活して『文化の違い＝各々のバックグラウンドの多様性』だと肌で感じる事が出来た」と認識の変化を実感している。

2点目の働き方の違いについては、「プログラムに参加する前、日本で就職活動を経験したり、日本の働き方について身近な人にアンケートを取ったりしていたため、オーストラリアと日本の働き方

の違いについて比較することができた」。さらに現地での企業訪問などを通して、労働環境やキャリアの積み方の違いの背景には、日豪の文化の違いがあるのではないかと考えるようになった。

現地で働く人の話を聞いて思ったのは、「自分はこんな人です」というアピールの大切さと、どんな風に生きていきたいかという理想を持つことが大切で、オーストラリアのような働き方なら、働き方が多様化する日本でも各々自分の満足のいくキャリアの積み方ができそうだと考えた。

3点目の「自信を持つことの大切さ」は、参加時点でBがもっていた劣等感の克服と関連している。他の日本人学生は入試偏差値では自分よりも高い大学の学生で、「いくらみんなが私と仲良くしてくれていたとしても内心どう思われているかわからなくて怖いなと思っていた時は少なからずあった。そのことが自分自身を過小評価につながり自信がなくなって消極的になっているのがわかっていたので終始危機感を感じていた。しかし実際はそのような必要はなくて、自分が正しいと思うことなら、責任をもって発言すべきだということを痛感した」。

この変化の根底には学びの第一点目に挙げているように、文化背景の違う移民たちで構成されるオーストラリア社会では、自分の意見を持ちそれを相手に伝えることが重要であるという気づきがある。また、学歴や性別ではなく、自分がどのような人間で、何ができるのかということを示すことによって判断されるということを実感し、自分のできること、特技を生かすべきだと考えるようになった。Bの場合はパワーポイントの編集という特技が自信になった。これは最終発表において活かされ、Bのチームは「ハンドアウト賞」を得た。

4. 学び

研修を通して「やはり自分は日本人なのだ」と自覚したことから、自分らしく働くには日本で働くことが向いているという気づきをもたらした。一方で、オーストラリアでは常に自分の専門性を軸にした仕事の選び方が重視されるが、その点に触れて専門性を高めて自分の強みとすることの重要性に気づいた。この二つが本プログラムに参加して得た直接的な学びであり、このことはプログラム参加動機の一つであった、進路選択に関わる迷いに対しての現時点での解決を得たこととなった。それをふまえて、Bは以下のように留学を今後の学習やキャリアに位置づけている。

この4週間で異文化を知れば知るほど、ワークライフバランスを重視する海外勤務への憧れが高まってきたが、しばらく経った今、将来はグローバルを見据えてグローバルな仕事をしたいと考えている。具体的には地元の農業振興に携わり世界に発信していきたい。これを実現するための手段としてGPPでもどかしかった経験や異文化とのかかわり方が生かされると思うが大学院での2年間でさらにブラッシュアップしていきたいと考えている。

さらに、工藤（2011）のいう「解釈の枠組みの変化」という点での成果が指摘できよう。その一つは、研修参加前には「日本・アジア・欧米」という枠組みによる分類として「欧米圏のオーストラリア」という見方をしていたが、4週間のメルボルン滞在後には「多様なバックグラウンドを持つ移民たちによって構成された社会」としてオーストラリアを見るようになったということである。また働

き方についての考え方も、社会の在り方に文化的背景が及ぼす影響の大きさを知ったことにより、「長時間労働の日本」という固定した枠組みではなく、現状のような働き方制度になっている背景を文化面から理解し、制度が変化しつつある面も捉えられるようになった。

Bが留学からこのような成果を得た背景には、大学入学時から外国で学ぶことに関心があり、大学の留学プログラムに1年次から参加していたこと、それを通して次の学びを意識して意思表示することで、指導教員等からの的確な支援を得ることができたこと、就職活動を経験し本プログラムのテーマであるグローバルな働き方に対しての問題意識が醸成されていたこと、という条件があったことが指摘できる。

Bのケースは、性質の異なる短期海外研修プログラムを、しかるべき段階を経ながら複数回経験することで、大学生としての学修活動に留学が統合され、学びを深化させることの好事例といえる。

参考文献

工藤和宏. 2011. 「短期海外研修プログラムの教育的効果とは-再考と提言-」『留学交流』2011年12月号 Vol.9